

北朝鮮弾道ミサイル発射騒動から見えてくるもの

軍事問題研究家 山崎 八九生

<なぜ弾道ミサイル発射と核実験を強行するのか>

「なぜ北朝鮮は弾道ミサイル開発や核実験を強行するの？ そんなお金があったら飢えた国民のために食糧を輸入すればいいのに、あの国のやろうとしていることがよく分からない」という疑問の声をよく聞くし、そのような質問をしばしば受ける。

その答えは簡単明瞭だ。「北朝鮮（より正確には、金王朝と軍上層部）は“生き残る”ための手段として核弾頭と長距離弾道ミサイルの開発に奔走している」のである。他方、食糧不足から国民が餓死しようとも、その大半は彼らが定義した「敵対層」や「動揺層」だから、むしろ自分達「核心層」にとっては、「反政府的な層の数が減るのでかえって好都合」ぐらいにしか思っていないのかもしれない。

因みに北朝鮮指導部は、自分達がルーマニアのチャウシェクスやリビアのカダフィーが辿った末路のようになることを危惧しているらしい。そうなるのを恐れて、経済立て直しのための思い切った開放政策を取れずにいる。

<対米交渉の切り札として>

1993年のカーター元米大統領の訪朝で回避されたが、アメリカは北朝鮮寧辺（ニョンビョン）の核施設を空爆する寸前だったと言われている。また2003年にアメリカが「難癖をつけて」一方的に始めたイラク戦争は、「イラクが大量破壊兵器を保有、そして破棄しなかったからではなく、保有していなかったからこそ戦争をしかけられたのだ」と北朝鮮は分析し、2006年の核実験に至ったものと考えられる。

「核」は小型化させて核弾頭として弾道ミサイルに搭載すれば、その能力を格段に増し、有力な外交政治のカードになる。少なくとも北朝鮮はそう確信している。そのような「政治的兵器」を獲得することで、軍事面では「核抑止力」を得てアメリカの軍事攻撃を防ぎ、政治面では米朝二国間交渉が可能になるまでのレベルに地位向上を果したいと目論んでいる。

一方、拉致問題のこじれで暗礁に乗り上げたままの対日関係は、「対米追従の日本など、米朝交渉さえ上手くまとまれば、日本はそれに従うだけだろう」とタカを括られている感がある。

<開発が進む弾道ミサイル>

あっけなく爆発・飛散した今回の打ち上げだが、その能力は確実に向上していると思われる。

ロケットの液体燃料は、固体燃料に比べ推力が大きいため、ペイロード（搭載量）も大きくなるという利点があるものの、もともと爆発しやすい性質をもち、米ソ共初期の ICBM（大陸間弾道弾）などはしばしば打ち上げに失敗して爆発している。だから ICBM など長距離弾道ミサイルの開発途上にある北朝鮮の今回の失敗は特別なものではない。

確実に射程が伸びていることに加え、今回は北から南という縦方向に発射している。これはこれまで2回行われた西から東という横方向に発射するよりも相対的にやや高度な技術を要求される。

なぜなら人工衛星を地球の周回軌道に乗せるには、秒速 8000m以上の速力を要するが、地球は秒速 400mで自転しているため、自転方向に向って打ち上げれば、その分の速度を利用できるが、縦方向ではそれができない。

偵察衛星が地球表面を「スキャン」するには縦方向の周回軌道に乗せる必要があり、そんな偵察衛星の打ち上げ成功で国威発揚を試みたのであろう。また横方向に打ち上げなかったのは、日本、と言うよりも在日米軍基地への「配慮」があったのかもしれない。

<BMD（弾道ミサイル防衛）への疑問>

2009年の発射実験の時もそうだったが、今回はそれ以上にマスコミ総出となつて、SM-3を搭載したイージス艦やパトリオット PAC-3の一大デモンストレーションを行った。1兆円もの巨費を投じたシステムの存在感を誇示するためでもあったろうが、いくら望遠レンズで撮影しているとはいえ、パトリオット格納筒はともかく、操作員の自衛官らの動きが丸見えだったことは、実戦ならば狙撃されないのだろうかと不安に感じた。

大気圏に再突入した弾道ミサイルは、ライフル銃の銃口を飛び出す弾丸の何倍もの速さになっている。そのため近接信管（標的に最接近した時点で作動する信管）では時間的に間に合わないのでダイレクトヒットさせて破壊するのだが、導入前から既にその困難さが指摘されていた。

確かにコンピューターの性能向上による解析能力の速さと精度の高さによって、実験や訓練での命中率は上がっていると言われているが、それは単弾頭の場合であつて、オトリ（ダミー）の放出や複数弾頭化された場合の対応能力は低いままのようだ。また単弾頭であつても、再突入時にその衝撃で2個以上に破断して不規則な落下弾道になってしまうと対応できなくなると言われている。

さらに大気圏外で迎撃する SM-3 の場合だが、弾道ミサイルの射程が延びて

ICBM クラスになると、必然的に高度が高くなり（弾道ミサイルは逆 U 字型の放物線を描いて飛翔するため、底辺に相当する距離が長くなるということは、逆 U 字の頂点が高くなることを意味する）現在の SM-3 では迎撃高度が不足することが懸念されている。

今回の配備は、切り離された一段目の「燃えカス」が我国の領空に落下しそうな場合での迎撃だったそうだが、関係者はそのような事態にならずにすんで安堵しているのではないだろうか。もちろん「燃えカス」を見事破壊できれば大いに意気が上ったであろうが、逆に失敗してしまう公算の方が高かったように思うのは私だけだろうか。

軽々しく「歴史は繰り返す」などと言うつもりはないが、かつて連合艦隊の重巡洋艦部隊による長距離（2 万メートル）砲撃演習での命中率は 5% とされ、列国海軍のそれに比べかなり高いものと自負していたが、実際に生じたスラバヤ沖海戦やアッツ沖海戦では 0.25% と 0.56% ほどで、「想定」の 20 分の 1 と 10 分の 1 でしかなかったことを想起してしまった。

<横田めぐみさんの「遺骨」騒動>

前項の「ミサイル騒動」に加え、もう一つ想起したことがある。それは横田めぐみさんの「遺骨」がにせものと大々的に報道されたことだ。

北朝鮮が「横田めぐみさんの遺骨」として提出した火葬された骨の DNA 鑑定を依頼された日本の二つの検査機関の一つは「鑑定不能」として鑑定せず、もう一つは鑑定した結果「横田めぐみさんのものとは特定できない」とした。

簡単に言えば「分からない」でしかない。ところが、「特定できない」がなぜか「めぐみさんのものではない」、「にせもの」ということになってしまい、「まともや北朝鮮は我々をだまそうとした」、さらには「めぐみさんは生きている（に違いない）」という情動的なキャンペーン報道になってしまった。

もちろん横田めぐみさんのご両親やその関係者がそう思う（思いたい）のは至極当然なことであり、そのことに異を挟む気持ちは毛頭ない。しかし、私情を排した客観的な報道をすべきはずのマスコミのこのような報道姿勢にはそのレベルの低さと世論のミスリードの危険性に不快感を覚えた。また、情動的になって一色に染まりやすい国民性の危険さも同時に感じてしまった。

<次の核実験は濃縮ウラン型か？>

北朝鮮の三度目の核実験強行が噂されているが、北朝鮮がこれまでに入手した自前のプルトニウム（Pu239）は比較的少量であるため、今度行われるかもしれない核実験には濃縮ウラン（U235）を用いるのではないかと推測している。たとえ今回ではなくてもいずれは水爆開発を視野に入れた濃縮ウランでの核実

験を試みるのではないだろうか。

原爆よりも威力のある水爆（核分裂の原爆は、臨界量の制約があるため、威力の向上には限界がある。それに対し水爆は核融合であり、臨界量の制約がないため理論上は無限にその威力を拡大でき、かつては数十メガトンのもが開発された。しかし爆発力の向上よりも命中精度の向上の方がはるかに効率的で現実的でもあるので、今日では戦略核兵器でも1メガトン以下の核弾頭が大半である）にはその起爆剤として原爆を用いるのが通常だが、1964年に中国が最初の核実験をした時の原爆がプルトニウム型ではなくウラン型だったので、「さらに水爆開発を目指している」と推測された。その説明として、原爆の素材としてウラン（U235）を用いた方がプルトニウム（Pu239）の場合よりも水爆実験が容易だと言われたことがある。

その詳しい理由は不明だが、原爆の核爆発によって生じる中性子放射量を少なくできるからではないかと推測している。ただしその場合でも起爆方法は、ウランであってもプルトニウム型と同じ爆縮方式である。

それゆえ、北朝鮮3回目の核実験はウラン濃縮の実績を誇示する意味からもウラン型原爆になる可能性がかなり高いように思える。

<黒鉛型と軽水炉型原子炉からのプルトニウム>

冒頭の「なぜ北朝鮮は核開発をやめないのか」との質問と連動して、「なぜアメリカは北朝鮮が（小規模な）黒鉛炉を廃棄すれば、その見返りとして（本格的な）軽水炉をしかも2基提供すると言ったのか？ より大規模な原子炉から取り出したプルトニウムでより多くの核兵器の材料を与えてしまうのではないのか？」と聞かれたことがある。

私は軍事問題研究者としては少数派かもしれない「核武装反対」「反原発」の立場であるので、何度か「反原発」の集会に顔を出したことがあり、その際にセンセーショナルな「日本各地の原発からは毎年長崎型原爆千発分のプルトニウムが生み出されている」との主張に遭遇したことがある。

詳しくは軍事月刊誌の「丸」2011年7月号に掲載の拙論を参照していただきたいが、黒鉛炉（元々は、発電ではなく、核兵器用のプルトニウムを生成するための原子炉として開発された）と違い、軽水炉の使用済み核燃料から取り出したプルトニウム（それを「再処理」と言う）は、核兵器級のそれとはプルトニウム同位体の配分率が相当異なり、要は「マトモな」原爆には成り得ない。

だからアメリカは、軽水炉を提供することで、黒鉛炉を廃棄させようとしたのである。

<北朝鮮にどう対処すべきなのか>

北朝鮮は日本にとって唯一国交のない国であり、核兵器開発に狂奔するなどまことに厄介な「隣人」である。そんな「隣人」に対し、最も短絡的で稚拙な対応が「日本の核武装」である。

日本が仮に核武装したとして（諸般の事情から様々な困難が予想され、事実上不可能だが）も、それでひるむような北朝鮮ではなく、むしろそれを奇貨とつか、口実してより一層の核開発に奔走するであろう。それは中国とても同じで、日本が配備するより以上の核兵器を配備して臨んでくることは十分予想できる。そのため日本の地政学上の狭隘な国土と人口密度、政治風土から言っても、核武装は日本の安全保障能力を高めるものでは断じてあり得ない。

一方、冒頭で述べたように北朝鮮の弾道ミサイルと核兵器開発は、日本を核攻撃するためのものではなく、対米交渉のカードであるのだから、当面は北朝鮮に対して、「弾道ミサイルと核兵器の開発を放棄するのなら、日本はアメリカの極東最大の同盟国として、米国が貴国への軍事行動をしないよう働きかけ、また日本も経済援助を惜しまない」とのメッセージを繰り返し伝え、警戒しつつも静観するしかないのではないだろうか。

ベルリンの壁崩壊とそれに続くソ連邦の崩壊など、多くの矛盾を抱えながらも依然として強固だと思われていた国家であっても、「チョットしたこと」で、それまで堰き止められていたエネルギーが噴き出すと崩壊の過程は一挙に進み、もはや誰にもそれを止められなくなる。

崩壊確実と言われながらも、ここ 20 年ほど保たれてきた北朝鮮の金王朝が崩壊する時もそのようなものになると思う。いずれはほぼ確実にやってくるであろうこの激動をどのようにして乗り切るのかで我国の力量が試されるのである。

2012 年 5 月 5 日脱稿